

## 教育講演1

### 突発性難聴の治療に高気圧酸素治療は有効か？

武市紀人

北海道大学大学院医学研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

突発性難聴は本邦において毎年約35,000人の新規罹患を認める頻度の高い原因不明の疾患である。厚生労働省による難治性疾患克服研究事業では対象疾患に指定され調査研究班において疫学、治療法などを始めとする様々な研究が継続的に行われている。治療法においては1980年にWilsonらによるdouble-blind studyによりステロイド治療の有効性が報告され、それ以来ステロイド治療が突発性難聴に対するGold-standardとなった。しかしながら、治癒率は全体の5割以下とされ絶対的な治療法とは言えない。また、合併症等により全身的なステロイド投与困難な症例も存在する。Wilsonらの報告は治療のガイドライン確立に貢献した一方、治療成績が頭打ちとなった現在においても治療の柔軟性を奪い、耳鼻科医にとってステロイドの呪縛から逃れることができないきっかけとなった。現在でも治療成績の検討の多くは全身ステロイド投与との併用療法が大部分である。

高気圧酸素治療はステロイドとの併用により突発性難聴の特に難治例、重度例に有効との報告が多い治療法である。当院を受診する突発性難聴患者はすでに他院において一次治療を行われ効果不良例が大部分である。当科ではそれらの患者に対し麻酔科との協力により入院による高気圧酸素治療の併用を推奨している。事前説明に承諾が得られた患者に対し、2.4ATA, 60分以上、計10回の高気圧酸素治療をステロイド、循環改善剤、星状神経節レーザーブロックとともに併用している。該当症例は2009年1月から2011年12月までの3年間では31例であった。厚労省研究班の判定基準に基づき治療後の成績を評価すると、治癒6例(19%)、著明改善7例(23%)、回復9例(29%)、不変9例(29%)であった。2001年の調査研究班による全国調査の結果では全646例中、治癒285例(44%)、著明改善135例(21%)、回復101例(16%)、不変125例(19%)であり、当科の成績は

全国調査の結果と比較すると必ずしも高い有効率を示すものではない。しかし、全国調査においては一次治療症例が多く初診時の重症度分類でも軽度のGrade IとIIが半数近いのに対し、当科症例は一次治療後の無効例が多く重度のGrade IIIとIV例が7割以上を占めていた。当科での治療目的が救済治療であることを考慮すると4割以上の方が治癒または著明改善まで救済されたことになり、有意義な治療法と考える。他に予後に影響を与えた要因を当科症例および文献的に考察すると、当科の結果を含め高度難聴症例には有効との報告が多い。一方、軽症例では併用した場合と併用しない場合で大きな差が無いため必ずしも高気圧酸素治療は必要ない、とされている。また、治療開始時期に関しては早ければ早いほど良い、という大原則があるのは当然として、発症早期では併用した場合と併用しない場合で大きな差が無いとされる一方で発症後数ヶ月の経過症例では高気圧酸素治療を併用しても有効性に乏しいとされている。総合すると発症後1から2ヶ月の症例には高気圧酸素治療を勧めるべきとする報告が多い。

コクラン・ライブラリーを始めとする多くの報告が突発性難聴に対する高気圧酸素治療の有効性の評価が不十分であるとしているが、大規模な比較検討は現実的には困難である。臨床の現場では個々の症例に対して慎重かつ迅速な判断が必要であるが、現状では高気圧酸素治療は勧めるに値する有効な治療法の一つと考える。